



第七十三号

会報 浄土真宗 太陽の会

「春爛漫」

はるらんまん



令和三年の四月上旬、今年も見ごたえのある満開の桜が咲き誇りました。「春爛漫」とは、冬の厳しい寒さも終わりを春を迎え暖かな春らしい気候の中、花が一面咲き乱れている様子を表す言葉です。まさに「春爛漫」という言葉がピッタリな景色が広がりました。昨今コロナウイルス感染症拡大の影響でお花見という行事も随分と様子を変えてきています。しかし、毎年春になると厳しい冬の寒さから目覚めた草木に一齐に花が咲き誇ります。私たちの状況とは、関係なくめぐる四季に

かし、毎年春になると厳しい冬の寒さから目覚めた草木に一齐に花が咲き誇ります。私たちの状況とは、関係なくめぐる四季に

自然の懐の深さを感じます。

コロナウイルス感染症の猛威は留まることを知らず感染が拡大しています。その猛威に私たちが出来る事は何かと模索しその新しい常識が心に知らず知らずのうちにストレスを生んでしまう事もあります。そのようなときは是非太陽の会にお参りいただき、敷地内に咲く花に四季を感じてもらい目や鼻や肌で感じる空気にリラックスしていただけたらと思います。



「下がり藤」

藤は長寿で繁殖力の強いことから、おめでたい植物として古くより親しまれてきました。平安時代、藤原氏が藤門を用いたことにより日本各地で多く使われるようになりました。

本願寺派で「下がり藤」が使われているのは、大谷派と公家の九条家とが婚姻関係となり九条家の家門であった九条下がり藤が浄土真宗本願寺派の寺紋となつたと言われています。



浄土真宗本願寺派 寺紋



「花まつり週間」

毎年行われる花まつり週間を受付け付近にお釈迦さまをおまつりして開催致しました。例年はあま茶をお接待させていただいていましたが、コロナ感染防止の



観点から中止して華^け芭^はをお配りいたしました。華芭とは、仏さまに捧げる花びらに模した儀式に使用するもので、記念やお守り代わりにお持ち帰りいただきました。

4月8日は「花まつり」。お釈迦さまのご誕生をお祝いします。お釈迦さまがお生まれになった時、花が一斉に咲き空から甘い雨がふつたとされています。

「お釈迦さまのおはな」

【誕生からの七歩】

今から約二千五百年前、インドの北(現在のネパール)に、釈迦族と呼ばれる種族が、カピラ城を中心に小さな国をつくっていました。国王はスッドーダナ王、妃はマヤー夫人といいました。

マヤー夫人は出産のために、自分の生まれた国へ里帰りする途中、ルンビニの花園で休憩されました。そして、マヤー夫人が無憂樹(アシヨールカ)の枝に手を伸ばされた時、王子が誕生されたことと伝えられています。時は、四月八日のことであつたといわれています。この王子はシツダッタと名付けられました。

シツダッタ太子は、後にさとりを開いてブツタとなられたので、「釈尊」(釈迦族出身の尊い方)とか「お釈迦さま」と呼ばれるようになりました。

仏伝によると、お釈迦さまは生まれるとすぐに七歩あるいて、右手で天を、左手で地を指さし、「天上天下 唯我独尊」

(天にも知にも ただ我ひとり尊し)と叫ばれました。その時、天は感動して甘露の雨を降らせたといっています。

「七歩あるいた」

ということ、迷いの世界である六道を超えたということを表します。生まれてすぐに迷いを超えてさとりを開かれたわけではありませんが、後にさとりを開いてブツタに成られたということを、誕生の所に引き寄せて表しているのです。

また、「天上天下 唯我独尊」という言葉は、決して「他人と比べて、この世の中で自分が一番尊い」という傲慢な意味ではなく、「私のいのちは、天にも地にも、この世の中にたった一つしかない、かけがえのない尊いものちである。」という意味であり、すべてのいのちの尊さを教えてくれる大切な教えの一つなのです。



合掌

「クイズ浄土真宗」

Q、阿弥陀仏の前身とされる菩薩は？

① 『法蔵菩薩』

② 『観音菩薩』

③ 『弥勒菩薩』

仏教は、すべての存在なり現象というのは、原因があつて結果があるという因果応報を説く教えです。阿弥陀仏という仏果（さとのりの結果）を得るには、必ずその原因となる要素・状態があつたというわけです。それは菩薩として修行されている期間をさします。阿弥陀仏も、菩薩として修行に励まれ徳を積まれて、すべての生きとし生けるものの苦悩を根本から解いて救おうとされたのでした。その菩薩時代のお名前を法蔵菩薩と



申されます。「法」という真理の集積された「蔵」という意味です。阿弥陀仏は、この法蔵菩薩のときに無上の誓願を建て、ついに、すべての者たちを救い取るための浄土を完成されたのです。

ちなみに、観音菩薩は阿弥陀仏の元で修行されている身で、阿弥陀仏を敬い、つねに念頭に置かれていますが、観音像の宝冠に描かれた化仏に表されています。また、弥勒菩薩は、お釈迦さま亡きあと、五十六億七千万年後にこの世に誕生され、人々を救おうとされる菩薩です。菩薩とは、衆生救済を誓い修行されている大乘の実践者のことです。



Q、阿弥陀仏の前身とされる菩薩は？

クイズの答え・①

「歎異抄を読む」

たんにしよう

『歎異抄』は、親鸞聖人が亡くなった後、門弟の間に真実の信心に背く異議が生じたことから、聖人から口伝を受けた著者が、同心の行者の不審を除くために著した親鸞聖人の言語録です。

本願を信ぜんには、他の善も要にあらざ、念仏にまさるべき善なきゆゑに。

悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆゑに。

釋蓮如（『歎異抄』第一条）

善をほこらず悪をおそれず

阿弥陀さまの救いの前では、私の善悪は問われない。そんな阿弥陀さまの大きな心に出遭った時、私の生き方が変わる。



「一月～四月の言葉」

太陽の会では、館内入口・本堂入口に「月のことば」を掲載させて頂いております。お経は難しいと思われる方もいらっしゃると思いますが、身近なやさしいお言葉として皆様のお心で味わって頂けたら幸いです。

【一月のことば】

私を生かしておる力というものに帰っていく歩みそれが仏道

「釋智雄」

私たちの自己中心的で身勝手な考えで「いのち」を見ているかぎり、これからもまだ迷いの中で、今を「生きていること」を慶べず、苦悩し続けるしかないのです。そのような私たちだけでも、今念仏申させていただく中に、如来さまの知恵と慈悲を恵まれていたことを慶ばれているのです。

【二月のことば】

念仏者の人生はまさに

慚愧と歎毒の交錯

「祥實圓師」

私の称える「南無阿弥陀仏」とは、今を生きる身勝手な「私」を丸ごと認めてくださる親心なのです。阿弥陀さまの「親心」を聞信して、「ご恩の一つでも気付かせていただきましょう。聞信の中でまさに「歡喜」と「慚愧」の交わる人生なのです。

【三月のことば】

私の上にあるものは全部賜うたものである

「細川廉師」

「恩徳讃」如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし師主知識の恩徳もほねをくだきても謝すべしとありますように知徳報恩どこまでも自分のことしか考えられない浅ましさに気付き報恩の心にめぐまれる。先人達のご苦勞に感謝しお念仏の生活の中で感謝と慶びに変わるのです。

【四月のことば】

如来さまより最も遠い身が

実は最も近い身でありました

「和氣良晴」

親鸞聖人は、阿弥陀如来の光明が無明の闇を破ることを「正信偈」に、撰取の心光、常に照護したまう。すでによく無明の闇を破すといへどもと仰せになられています。阿弥陀如来の光明が私に至らなければ、自分の力で本願を疑う闇を破ることはあり得ないのです。

令和三年「法事について」

【ご法事のご予約は現在も承っております。今後ともマスク・アルコール消毒等のご協力をお願い致します。】

2020 東京オリンピック

ピンパッチ(マグネット式)プレゼント



太陽の会寺務所・受付にて無料配布しています。

※数に限りがあります